

行きつ戻りつ

—子どもたちと出会い直す—



【陸前高田での再始動】

9月中旬まで、Ed.ベンチャーと協働で進めてきた「すたんどばいみー」のモビリアでの支援活動が再始動となりました。9月にモビリアで行われた会は、区切りであると同時に、始まりにもなったようで、それから2ヶ月の時を経て、次のような目的と企画のもとに行うことが提案され、12月から再始動となりました。すたんどばいみーの課題としては、①遠くにいる被災した日本人の子どもへの支援の可能性を探ることと、②陸前高田に外国人の子どもがいるとしたら、どのような場合で、どのような生活をし、どのような被災状況にあるのかを探索することの2点でした。また、子ども向けには、これまでかかわりのあった中学生を対象に、すたんどばいみーの神奈川の家庭でのホームステイを企画することでした。



久しぶりに訪問となったすたんどばいみーのメンバーからの報告によると、特に小学校低学年の子どもたちは再訪問を大変楽しみにしていたようで、「一週間前から待っていた」と話していたそうです。また、地域に住む外国人の子どもたちにも支援の手を伸ばそうと考えて、子どもたちに外国人家庭がないかどうかの聞き取りも始めたようです。お母さんがフィリピン人や中国人という子どもはいるようで、次回からの活動に誘って来てくれるように種をまいたりしてみたそうです。Ed.ベンチャーとしては、今後、すたんどばいみーの取り組みに対して金銭的な支援をしていきたいと考えています。

一方、教育支援チーム「まつ」の活動は、米崎小中学校まで支援を広げていくために、米崎小中学校の訪問を行いました。米崎小中学校は津波の被害にはあっていませんが、中学校は地震のために校舎や校庭に亀裂が入り使えない状態にあり、小友や広田地区と同様に、小中学校合同で米崎小学校の校舎を使用して学校再開をしています。Ed.ベンチャーの支援では手が回らない地区ではありましたが、中学校レベルでは、小友・広田・米崎の3校の統廃合が検討されているとのことで、「まつ」では支援の範囲を広げることとなりました。今後、「まつ」では、12月23日（金）12時～14時で、定款の検討と学校連絡協議会の段取りを検討することになっています。ご興味のある方は是非ご参加ください。

【震災後の事情・・・石巻の子ども支援】

私たちが石巻で活動拠点として使わせていただいているサポートセンターの正式名称が「万石ささえあい拠点センター」に決まりました。事務室にはサポートスタッフさんが昼間常駐し、私たちの無理なお願いにも快く応じて下さいます。

このセンターに活動を移してからは、地域の子どもの参加が急に増えていることは以前にも触れました。遊ぶ場所がなくなったり遊ぶ友人関係などが変化したりという

「震災以後の事情」が影響しているようにも思えます。避難所での支援をしていた頃には、ライオン学校のメンバーが、「友達を連れてきた」という形で新しい子どもたちを迎えたのですが、この頃はどこからか聞いて訪れる子どもたちが多くなりました。それは、ロコミだったり、楽しそうに遊んでいたからのぞきにきた、といったきっかけだったりします。遊びながら「これって、毎週やっているんですか?」という質問をしてくる子どももいて、今までの経過を知らない子ども達にどのように説明をしたものやら、戸惑ってしまいます。

3日（土）も多くの新しい顔が活動に参加しました。一日冷たい雨が降り続くという天候で、ライオン隊のメンバーも外遊びができず一日屋内での活動です。我慢できず外でキャッチボールに挑戦しても、10分ほどでびしょりに濡れてもどってきました。

楽器を持ち込んで、立教大学の有本先生を中心に「歌遊びと合唱」にチャレンジしました。歌いながら体を使っての遊びでは、恥ずかしがっていた男の子たちも、徐々にみんなで手をつなぎ、楽しく遊ぶことができましたし、合唱も、元気いっぱいに歌えました。休憩の間、活動にはあまり積極的ではなかった男の子が、真剣に楽器に触っていた姿が印象的でした。今回教えてもらった「さんぼ」と「大きなうた」は、ライオン学校の歌にしたいと思います。



25日に予定している「大衆演劇公演」のための準備の活動が二日目のメインになりました。前日とは違って空は晴れているものの、冷たい風が音を立てて吹き付ける中、自分たちでチームを作って、仮設住宅の1軒1軒に声をかけてチラシを渡していきます。どのチームも、大きな声で立派にあいさつと説明を行い、たくさんのお褒めの言葉をいただいたようでした。言葉だけでなく、ミカンやチョコレートをいただいて帰ってきたチームもありました。この日、万石浦の空には大きくきれいな虹がかかっていました。看板作りや司会などの準備分担も決め、24日には全員で作業をすることになりました。

二日間にわたる活動は、全体的にとってもスムーズにおこなわれましたが、一方では今まではない課題が見えてきました。その一つは、新しい子どもたちの参入がもたらしたものです。9月までの避難所での支援で見えてきたことは、参加していた子どもたちが、それぞれ様々な「生きづらさ」を抱えているということでした。それは、時には暴力や「荒れ」となって現れ、時には甘えとなって現れていました。当然、日常生活の中心である学校においても、子どもたちは上手に振るまうことはできません。ですから、小学校での授業参観で見た姿は、「檻の中の病気ライオン」のようだったのです。しかしそんな彼らが、自由に、気兼ねなく自分を出せるところが、私たちの支援の場だったのです。それは、日常の人間関係とは切り離された、「よその大人達」が作る場所だ

ったからこそ、自分自身を正直に表せたのかもしれませんが、修学旅行や集団遊びの中で大きく成長できたのかもしれませんが。しかし、今そこに、多くの子どもたちが参加し始めました。今回の支援では、ほとんどの活動がスムーズに進行しましたが、よく観察すると、それは新しく参加した子どもたちの力であったりするのです。そもそものライオン学校が、そんなにスムーズに行くはずはないのです。このスムーズさは、元のメンバーから主導権が新しく参加した子ども達に移ったことを意味します。言葉を換えれば、支援の場が、彼らが毎日経験している「〈日常の教室〉化」したと言えるのです。

歌を歌いながらも、上手に参加できない男の子達が、男性スタッフの膝に甘えるように座っていたのが、とても心に引っかかりました。

もう一つの問題は、私たちが想像した以上に、「震災以後の事情」による子ども達の生活環境の変化が大きいことです。離婚、失業、大家族の解体と挙げればきりがありません。支援1日目、このところ落ち着いてずいぶん成長したように思えた小2の男の子が、なぜかずいぶんあれていました。それはまるで以前に戻ったようです。心配で家庭に連絡。お母さんはお仕事があったため、おばあちゃんに来てもらって話をしました。そこでわかった環境の変化は、やはり子どもにとっては受け入れがたいこと。おじいちゃんやおばあちゃんが今までそばにいたのに、おじいちゃんおばあちゃんの仮設住宅はずいぶん離れたところになってしまい、なかなか会うこともできない。自分はお母さんと仮設で二人だけの生活。かといって、みんなで住むだけの広さは仮設にはない。放課後に通い始めた学童保育ではどうも先生とうまくいかない。通っている小学校は被災したので離れた中学校のグラウンドにプレハブで再開。毎朝通学バスで通っているが、クラスは荒れ始め、バスの中で同級生に鉛筆で目の下をつつかれたりしている。本人に「学校でいやなことあるの?」と聞くと、「たくさんある。」と答えてくれました。「たたかれたりするの?」「蹴られる。」・・・家では寂しく、外ではいやなことばかり・・・これがこの男の子の「震災以後の事情」なのです。

ライオン学校の「〈日常の教室〉化」と生活環境の変化を受け止めつつ、私たちの支援は何をすればいいのでしょうか。「行きつ戻りつ」しながら子どもたちが成長するように、私たちの模索も行きつ戻りつしているのです。

【福島県富岡町の学校再開支援】

今回の訪問時、富岡小中学校は、いつものゆったりした時間が流れている雰囲気とは異なり、そわそわ落ち着かない感じがありました。先生たちもどことなく忙しそうでした。どうしたものかと思いたずねると、翌日が「学習発表会」とのことでした。幼稚園から中学校までの合同での発表会だそうで、子どもたちも、先生も、それらの準備に忙しい様子でした。そのような中、いつも対応して下さる管理職の方のかわりに、これまであまりお話する機会がなかった先生方とお話することができました。そこでわかったことは、9月の学校再開にあたって、図画工作など子どもの使用する筆やパレットなどの支援物資は、ほとんどが中古だったということです。陸前高田で見た新品が配布されている4月の状況とのあまりの違いに、大変驚きました。「出遅れたところは、手に入るものが少ないのか」と感じる同時、最初に、富岡小中学校を訪問した際に、管理職の方が「支援提供をやめているところが多くあり、出遅れた感じがあります」と話され

ていたことを思い出した。というわけで、もう一度原点に戻って、個々の先生方のレベルまでおいて必要なものを聞き取り、提供するという営みを、継続的に続けていくことの必要性を実感する訪問となりました。

【支援隊活動記録 11月8日～12月6日】

■陸前高田学校支援

○11月15日(第26回)米崎小中学校訪問(支援チーム「まつ」との協働事業)

○11月19日(第27回)広田中学校への支援物資提供

○12月4～5日(第28回)すたんどばいみーによるモビリア仮設の子ども支援

□支援隊メンバー:清水睦美(東京理科大学)、柿本隆夫(引地台中学校)、塩入雄太(座間三菱)、すたんどばいみー(チューブサラン・西岡歩・高畑シゲミ)、グイキムチャーイ(会社員)

□支援物資:広田中学校校庭使用ライト

■石巻市万石浦子ども支援

○12月4日～5日(第17回)万石浦ライオン学校の12月活動

□支援隊メンバー:柿本隆夫(引地台中学校)、家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、清水睦美(東京理科大学)、小沼慶多・高柳恭介・宮澤葵・草野はるか(引地台中学校)、内藤順子・下新原なつみ・吉間里衣(大野原小学校)、大林沙紀・甘利悠貴(東京理科大学学生)、有本真紀・水谷智彦(立教大学)、坪田光平(東北大学大学院)

■富岡町学校再開支援

○12月2日(第5回)習字道具(中学校)・ブックトラック(小学校)

□支援隊メンバー 家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、清水睦美(東京理科大学)

□物資提供:習字道具(26セット)、ブックトラック(1台)

■ご協力いただいたみなさま(敬称略、順不同、物資・寄付を含む)11/8～12/6

安納電気(安電)〈ライト期間提供〉、トキワ堂〈習字道具提供〉、清水寛(屋代高校)、清水麻美(中条高校)、反町一樹(茅ヶ崎保健福祉事務所)、合同会社がんぼろう、堀健志(上越教育大学)、櫻井千夏(歯科衛生士)、大野かよ、佐藤彰男(群馬中小企業家同友会)

※Ed.ベンチャーとすたんどばいみーの活動に関して、全労済からインタビューの申し込みがありました。全労済HPの「被災者・被災地の復興に向けて」にアップされておりますので、ご覧ください。http://www.zenrosai.coop/reconstruction/temblor/index.php

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

